サムエル記第一（26）
「サウルから王位が取り去られる」
1 サム 15：24～35

1. 文脈の確認
   Ⅰ．王政に向けた準備（1～9 章）
   Ⅱ．サウルの治世（10～31 章）
      A. サウルの確立（10～14 章）
      B. サウルの没落（15 章）
         1. 従うことは、いけにえにまさる（15：1～23）
         2. サウルから王位が取り去られる（15：24～35）

2. 注目すべき点
   （1）サウルは罪を告白するが、真の悔い改めには至っていない。
      ①罪そのものへの悲しみよりも、失った立場を回復したいという思いが見える。
   （2）王位剥奪の決定は撤回されない。
      ①サウルがサムエルの上着の裾をつかみ、それが裂ける。
      ②サムエルはこれを象徴的に解釈する。
   （3）サウルが気にしているのは「人からどう見られるか」である。
      ①これはサウルとダビデを比較する際の重要なポイントになる。
   （4）サウルとサムエルの決別が決定的になる。
      ①サウルが神の王としての承認を失ったことを目に見える形で示している。
      ②16 章では直ちにダビデの油注ぎへと物語が進む。

命題：神が求めておられるのは、口先の告白ではなく、神を恐れる真の悔い改めである。
この箇所を 3 区分して学ぶと、そのことが分かる。
Ⅰ．罪を告白するサウル（24～25 節）
1. 24 節
1Sa 15:24　サウルはサムエルに言った。「私は罪を犯しました。兵たちを恐れて、彼らの声に聞き従い、【主】の命令と、あなたのことばに背いたからです。
   （1）ここまでサウルは、自分の行為を正当化していた。
      ①13 節では「私は主の命令を守りました」と言った。
      ②15 節、21 節では責任を民に転嫁していた。
      ③23 節では、「【主】のことばに背くことは占いの罪に等しい」と指摘された。

（2）ついに「私は罪を犯しました」と認めた。

①これは一歩前進である。

②サウルは、自分の行為が神のことばへの違反、つまり罪であったことを認めた。

（3）しかし、「兵たちを恐れて、彼らの声に聞き従ったからです」と言った。

①サウルの罪の本質は、神を恐れるよりも民を恐れたことである。

②その根底には、神の評価よりも人間の評価を重視する心があった。

2．25 節

1Sa 15:25　どうか今、私の罪を見逃してください。そして、私が【主】を礼拝することができるように、一緒に帰ってください。」

（1）「私の罪を見逃してください」

①「私の罪を赦して、私との関係を回復してください」という意味であろう。

（2）「私が【主】を礼拝することができるように、一緒に帰ってください」

①サムエルが自分から離れて行けば、サウルの権威は失墜する。

②サウルの関心は、純粋に神との関係だけに向かっているわけではない。

③サムエルが自分と一緒にいるという外面的・公的な承認も求めている。

（3）「罪を認めること」と「真に悔い改めること」は同じではない。

①ダビデの告白は対照的である。

②「私は【主】の前に罪ある者です」（2 サム 12：13）

③詩篇 51 篇では、人の前での体面ではなく、神との関係の回復を求めている。

II．王位を失うサウル（26～31 節）

1．26 節

1Sa 15:26　サムエルはサウルに言った。「私はあなたと一緒に帰りません。あなたは【主】のことばを退け、【主】があなたをイスラエルの王位から退けられたからです。」

（1）サムエルは、サウルの願いを拒否した。

①23 節の宣告が繰り返されている。

②サウルの罪の告白によって、王位剝奪の決定が撤回されたわけではない。

③「罪の赦し」と「罪がもたらした結果」は区別する必要がある。

④悔い改めたからといって、罪によって生じた結果がすべて消えるわけではない。

2．27～28 節

1Sa 15:27　サムエルが引き返して行こうとしたとき、サウルが彼の上着の裾をつかんだので、上着は裂けた。
1Sa 15:28　サムエルは彼に言った。「【主】は、今日、あなたからイスラエル王国を引き裂いて、これをあなたよりすぐれた隣人に与えられました。

（1）サウルは、必死になってサムエルを引き止めようとした。

①サウルが上着の裾をつかんだので、それが裂けた。

（2）サムエルはこの出来事を象徴的に解釈する。

①イスラエル王国は、サウルよりすぐれた隣人に与えられる。

＊王国は、サウルの所有物ではない。

②偶然起こった出来事が、サウル王朝の運命を示す「しるし」となった。

③「あなたよりすぐれた隣人」とは、文脈上、ダビデを指している。

④ただし、この時点ではダビデの名はまだ明らかにされていない。

⑤次の 16 章でダビデが油注がれる。

3. 29 節

1Sa 15:29　実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、悔やむこともない。この方は人間ではないので、悔やむことがない。」

（1）29 節は神学的に非常に重要である。

①「イスラエルの栄光」は、神ご自身を指す非常に荘厳な呼称である。

②「偽ることもなく、悔やむこともない」とは、神が一度宣告されたサウルの王位剝奪は変更されないという意味である。

（2）11 節、35 節の「【主】は悔やまれた」と矛盾しない。

①11 節と 35 節は、人間の行動に対する神の悲しみと、歴史の中での神の対応の変化を、人間に理解できる言葉で表現している。

②29 節は、神の本質、約束、決定の確かさについて語っている。

4. 30 節

1Sa 15:30　サウルは言った。「私は罪を犯しました。しかし、どうか今は、私の民の長老とイスラエルとの前で私を立ててください。どうか一緒に帰ってください。私はあなたの神、【主】を礼拝します。」

（1）サウルは再び、「私は罪を犯しました。」と言った。

①次に「私の民の長老たちとイスラエルとの前で私を立ててください」と言った。

②「私の面目を保ってください」、「私を王として尊重してください」という意味。

③サウルの根本的な弱点は、神を恐れる以上に、人を恐れていたことである。

5. 31 節

1Sa 15:31　サムエルはサウルについて帰り、サウルは【主】を礼拝した。

(1) なぜサムエルは結局サウルについて行ったのか。

①サムエルが王位剝奪の宣告を撤回したという意味ではない。

②サムエルは、サウルが現実の王であることを認めたのである。

③サウルの王政は生涯続く。

④サウルを王として尊重しないなら、無政府状態に陥る。

Ⅲ. 神から退けられるサウル（32～35 節）

1. 32 節

1Sa 15:32　サムエルは言った。「アマレクの王アガグを、私のところに連れて来なさい。」アガグは、喜び勇んで彼のもとに来た。アガグは「きっと、死の苦しみが去るだろう」と思ったのであった。

(1)「アマレクの王アガグを、私のところに連れて来なさい」

①アガグは、死刑を免れたと思っていた。

②イスラエルの王に助命された以上、もう自分は安全だと考えたのであろう。

③サウルが神の命令を実行しなかったからといって、神の裁きそのものが取り消されたわけではない。

2. 33 節

1Sa 15:33　サムエルは言った。「おまえの剣が、女たちから子を奪ったように、おまえの母も、女たちのうちで子を奪われた者となる。」こうしてサムエルは、ギルガルにおいて【主】の前で、アガグをずたずたに切った。

(1) アガグへの裁きは単なる民族的憎悪ではない。

①アガグ自身が多くの人々を殺害してきた人物であった。

②アマレクは、出エジプト直後のイスラエルを攻撃し、特に弱い者たちを襲った。

③ここで実行されているのは、長い間保留されていた神の司法的裁きである。

(2) サムエルがサウルの不従順を処理した。

①サムエルは、ギルガルにおいて【主】の前でアガグをずたずたに切った。

②サウルが残した仕事をサムエルが完遂したのである。

③「聞き従うことは、いけにえにまさり」という原則が、実際の行動で示された。

3. 34～35 節

1Sa 15:34　サムエルはラマへ行き、サウルはサウルのギブアにある自分の家へ上って行った。

1Sa 15:35　サムエルは死ぬ日まで、再びサウルを見ることはなかった。しかしサムエルはサウルのことで悲しんだ。【主】も、サウルをイスラエルの王としたことを悔やまれた。

(1) サムエルとサウルは別々の道を行く。

①これは単なる地理的な情報以上の意味を持っている。

②二人の道が分かれたのである。

③サムエルは神のことばに従う預言者として歩み、サウルは神から王として退けられた者として歩むことになる。

(2) サウルは、31 章まで王として活動する。

①しかし、神の視点から見れば、王位継承についての決定はすでに下されている。

②ここから 16 章のダビデの油注ぎへと物語が進む。

(3) サムエルはサウルを悲しんだ。

①サムエルは、サウルの失敗を喜んでいたわけではない。

②ここに神のしもべの姿がある。

(4)「【主】は……悔やまれた」で 15 章が閉じられる。

①サウルの不従順によって、神とサウルとの関係に重大な変化が生じた。

②神の本質や御計画が気まぐれに変わるわけではない。

結論：今日の信者への適用

1. 罪の告白と真の悔い改めを区別する。

(1) 真の悔い改めは、単に「悪かった」と認めること以上のものである。

(2) それは、罪について神と同じ見方をし、方向転換して神に立ち返ることである。

2. 人を恐れるのではなく、神を恐れる。

(1) サウルの根本的な問題はここにある。

(2) これは今日の信者にとっても大きな誘惑である。

(3) 人を恐れる者は、神を恐れなくなる。

(4) 神を恐れる者は、人を恐れなくなる。

3. 罪は赦されても、その結果が残ることがある。

(1) サウルは「私は罪を犯しました」と告白した。

(2) しかし、王位剝奪という神の決定は変更されなかった。
(3) 裂けたサムエルの上着は、そのことを象徴している。
(4) 罪の赦しと、罪が生み出した結果の除去とは別問題である。
(5) だからこそ、「後で悔い改めればよい」と考えて罪を軽く扱ってはならない。
(6) しかし、ここで絶望する必要もない。
(7) 神は失敗した信者を見捨てる方ではない。